NEXUSYS 11 / BOOK VII

第2章 ダニエル・リード

01 — 地下の扉

旧タイレル社施設の地下にある業務用エレベーターには、階数の表示がなかった。ボタンの代わりに真鍮の鍵穴が一つあり、とうの昔に死んでいてもおかしくない人々の手によって磨き上げられていた。

ロイは扉の横で、レイチェル、ヌル、クロノスとともに待った。少年は肩のあたりが大きすぎる、ありふれた雨合羽を着ている。停止記録のうち自分に関わる部分を読んだあと、同行したいと申し出たのだ。ロイは、同行を願い出たからといって最後まで行く義務はないと伝えていた。

「僕が止めてと言ったら止まってくれる？」とクロノス。

「全員でな」とロイは答えた。

ヌルが鍵を回した。古い船が水に沈み込むような音を立て、エレベーターは下降した。昇降路は現在の建物の基礎よりも下へ伸び、研究所売却時に封鎖された階を通り抜け、白い陶製タイルを張りめぐらせた細長い空間へと続いていた。

最初の扉は開いていた。その奥には鋼鉄の格子で覆われた二枚目の扉がある。格子には、円の最下部が途切れた小さな印が描かれていた。あの盟約の記録にあった印と一致している。だが、それだけでは誰が描いたのかは分からない。

扉の上で照明が一つ明滅した。

「この場所を知っている」とクロノスがささやいた。

レイチェルは少年を見つめた。「ここに来たことを覚えているの？」

「違う。次にどのランプが消えるか分かるんだ」

二つ目のランプが消えた。計器は何の変化も示していないのに、ロイには気温が下がったように感じられた。ヌルは片手を上げ、一行を制止した。

少年が不可能な未来を予測した証拠はまだない。ランプは何年も前から故障しかけていたのかもしれない。それでも、そのタイミングはクロノスを怖がらせた。ロイはその恐怖を見世物のような実演として扱う気はなかった。

「戻るか？」とロイ。

クロノスは格子を見つめた。「まだ」

02 — 二人のための作業場

格子の向こうには、二人がやっと入れるほどの作業場があった。作業台は低く、引き出しには几帳面な字でラベルが貼られている。人工太陽灯の窓の下には、ひび割れた水槽が置かれていた。魚はいない。小さな木の家と針金のはしご、それに、描かれた太陽を十二分ごとに昇らせる仕掛けだけが残っていた。

レイチェルは引き出しを開けず、机の縁にそっと触れた。

「セバスチャンはこういうものを作っていたわ」と言った。「発明品に名前を付けることもあった。壊れると謝ることもあったの」

反対側の壁には、培養器の前に立つ三人の研究者の写真が掛かっていた。中央はJ・F・セバスチャン。その横には丸い眼鏡の若い助手。三人目は切り取られ、白く不規則な余白だけが残されている。

「ダニエル・リード」とレイチェルが言った。昨夜回収された人事記録の写真で、すでにその助手を確認していた。

クロノスは写真を調べた。「僕には似ていない」

「そうね」

「彼のこと、好きだった？」

「彼のいる部屋では居心地がよかったと覚えている。でも、その記憶が何を証明するかまでは言えないわ」

ロイは水槽の背後に挟まった紙のノートを見つけた。最初のページには人工培地で培養組織を維持するためのありふれた手順が並ぶ。後半には、傷ついた神経経路、移植組織の拒絶反応、生きた細胞を周囲の機能を止めずに取り替える費用についての計算がびっしりと書かれていた。

ある数式の下に、こうある。

《修復は置換と同じではない》

さらに濃いインクで一行が書き加えられていた。

《だからといって、患者が修復を拒まなければならないわけではない》

二つの言葉は矛盾していなかった。書いた人物がそれを理解するまでに何年かかったのか、ロイには想像もつかなかった。

03 — 台帳に残る名前

ヌルは湿気から守られた引き出しの中に、元の保守台帳を見つけた。そこにはダニエル・リードが、セバスチャンの研究班に配属された若手専門職員だと記されている。許可された研究領域は、遺伝的安定性、人工臓器の成長、神経組織の修復だった。タイレル社を去ったのは、交通事故の数年前である。

彼は巨大な製造企業ヘリックス・レプリカント・システムズへ移籍していた。同社の工場は後に競合企業へ吸収された。合併の記

録には何千もの特許が列挙され、人間についてはほとんど触れられていない。それでも、実験設備の認証には実際の署名が必要だったため、研究用の書類は残っていた。

「なぜ辞めた？」とロイ。

レイチェルはリード宛ての、投函されなかった手紙を読み上げた。紙にはセバスチャンの筆跡が走っている。

《患者を救う許可を求め続けるだけで、人生を終えるわけにはいかない。役に立つものを作れる場所であってほしい。そして、作らないと決める自由も許される場所であってほしい》

手紙には親愛の情と警告が込められていた。しかし、後の事故も、この部屋にいる少年のことも説明しない。

その下には、退職後のリードが作業場を訪れていたことを示す受領証があった。特殊な組織試料を返却し、試験機器を借りている。署名は不安定だったが、日付には何の異常もなかった。

クロノスは作業台に腰を下ろした。「その機械の音を覚えている」

「確かなの？」とレイチェル。

「違う。その音を覚えていると誰かに言われた記憶なんだ。最初の記憶がどこから始まるのか分からない」

ロイは台帳を閉じた。「今夜決めなくてもいい」

「分かってる。でも僕が決めなければ、ほかの誰かが決めてしまうんじゃないかって、ずっと考えてしまう」

04 — 壊れた道

事故が起きたのは、送電網の障害が発生した夜、ヘリックス社の東部バイオ技術工場の外だった。通勤車両が自動運転の貨物運搬車と衝突した。乗客三人は現場で死亡。リードは、脊髄、脳の一部、残存組織の生命を維持する臓器に重傷を負い、緊急手術室へ運ばれた。

事故前の彼は半分人間、半分レプリカントだったわけではない。ある理論を検証するために設計された存在でもなかった。記録にあるのは死に直面した一人の男と、彼を救おうとした医師たちだった。

最初の手術では、レプリカント研究から生まれた人工臓器が使われた。その後の治療では、切断された神経経路を生きた人工組織でつないだ。人間の顔の下に金属骨格があるような身体ではない。由来の異なる生物学的な構成要素が、互いに協調して機能することを学ばなければならない身体だった。

入院記録には、本人が署名した同意書が一通ある。しかし、その後の変更はもっと厄介だった。一通は深い鎮静状態で署名され、別の書類には患者がまだ意思表示できる状態に回復していない処置への許可が記されていた。最後の注記はこうだ。

《生存を優先し、連続性が保たれているものと推定する》

レイチェルは書類を別々のフォルダへ分けた。

「これで彼の命が救われた部分もある」と言った。「でも、選択する権利を奪った部分もあるかもしれない」

「医師たちには時間がなかった」とヌル。

「そうかもしれない。だからこそ検証するのよ。同じ理屈を何十年も使い続けてよいという許可にはならない」

クロノスは当初の脊髄再建図を見つめた。「彼が感謝していたとは書かれている？」

「いや」とロイ。「手術を生き延びたと書いてある」

作業場へ入って以来初めて、クロノスはほっとしたような顔をした。その後に起こったことすべてに、感謝を要求する者はいなかった。

05 — ヘリックスからの来訪者

調査を進めたことで、静かな警報が作動した。ネットワークを通じてではない。戸棚に埋め込まれた機械式の圧力スイッチが反応したのだ。廊下で警報ベルが鳴り、入口の向こうでは重い防護シャッターが昇降路を塞ぎ始めた。

ヌルはそれを止めに動いた。「回路は独立している。外からの命令じゃない」

「扉を支えられるか？」とロイ。

「一分。予備の錘が落ちたら、もっと短い」

ロイは最初のシャッターの下に入り、油圧整備棒で支えた。かつての身体なら最大出力で持ちこたえただろう。今は、浪費できない出力の限界を測りながら力をかけている。棒がたわんだ。

作業場の壁に古い映像が投影された。ヘリックス社の研究衣を着た女性だ。録画された顔は傷んだ画素に覆われている。

「この設備が強制的に開かれた場合、独立した証人が立ち会うまで、保管機構はすべての記録を封印します」

「証人ならいるわ」とレイチェルは答えた。しかし録画は彼女の言葉を聞けない。

装置は二つの物理的な証明を待っていた。一つは事故前のリードを知っていた者。もう一つはヘリックス社にもタイレル社にも由来しない、独立した立場の者によるものだ。

レイチェルはロイを見た。「企業が一方的に患者を所有物だと主張できないように作られているのね」

「なのに今は、その仕組みが俺たちを閉じ込めている」

クロノスは机へ行き、万年筆を見つけて二人の間に置いた。「僕の名前は書かなくていいの？」

「あなたがその書類を拒めることこそ必要なのよ」とレイチェル。

レイチェルは過去の本人確認の証人として署名した。ロイは現在の当人が記録を審査する権利を持つことの証人として署名した。シャッターが止まった。ヌルは非常レバーから手を放した。

録画が再開した。

「所有権の移転は、何ひとつ認証されていません」

しばらく誰も口を開かなかった。かつての企業社会では、その一文を残すためだけに複雑な安全機構が必要だったのだ。

06 — その間にあった人生

最後の戸棚には、四十年以上にわたる治療の要約が細い束となって収められていた。何度にもわたる身体の再建と生体組織の交換が記録されている。新しいカルテはそれぞれ以前のカルテの患者名を引き継ぎ、何が保存され、修復され、あるいは複製されたかについての留保を付けていた。

最も古い記録は、生き残った生身の人間が連続して存在していることを記述していた。後年の報告書はそうではない。そこには再構成された記憶、継承された習慣、主観的な経験が持続したかど

うかの不確実性が書かれていた。途中の少なくとも一人の患者は、さらなる再建を拒否したと記録している。記録はそこで途切れ、何年も後に、名前ではなく識別番号の下で再開していた。

「拒否を無視したの？」とクロノス。

「分からないわ」とレイチェル。「守られたと決めつけることもできない」

証拠には、患者と後継の存在を分ける明確な一本の境界線がない。また写真に写る研究助手と今ここにいる少年が、途切れることのない同じ意識を持っているという証明もない。

「もっと簡単だとよかった」とクロノス。

「俺もだ」とロイ。

「僕はダニエル・リードだと思う？」

「お前の身体を作った人間たちは、ダニエル・リードに結びつく記録を使ったと思う。お前は自分から望んだわけでもない記憶を持っている。そして自分の疑問を尋ねる権利がある」

「答えになっていないよ」

「そうだ。お前の人生を勝手に決めずに言えるのは、そこまでだ」

クロノスは閉じた戸棚に両手を置いた。見た目はとても幼い。だが難しい知らせを告げられるときに指を動かさない仕草には、長い経験がにじんでいた。

「なら記録は僕が持っていたい」と言った。「まだ公開したくない」

07 — そこにいた男

レイチェルは、セバスチャンが投函しなかった手紙を見せる前に、クロノスの許可を求めた。少年は二度読んだ。「作らないと決める自由」についての警告に差しかかると、紙の裏に説明があるかのようにひっくり返した。

「彼に怒っていた記憶がある」と言った。

「何について？」とレイチェル。

「分からない。扉のことで口論したんだ。外側から施錠できるようにしてはいけない、とどちらかが言った」

レイチェルは作業場の入口へ視線を向けた。非常用のシャッター操作は内側にあり、閉じ込められた誰もが手を伸ばせる位置にある。セバスチャンの作業場は、逃げ道を必要とする小さく弱い生き物のために作られていた。

「その口論は覚えているわ」とレイチェルが静かに言った。「私もそこにいた」

クロノスは顔を上げた。

「何があったか話せる」とレイチェルは続けた。「でも私の記憶を使って、それがあなたの記憶だと認めさせたりはしない」

少年は、それでも話してほしいと言った。レイチェルは、故障した留め具を直していた二人の若い研究者について語った。セバスチャンは、作業場で一番小さな住人でも、大きな誰かに許可を求めずに外へ出られるようにすべきだと主張していた。ダニエルはそれでは建物の警備が弱くなると文句を言った。セバスチャンは、出ていくことのできない安全は、檻の別名だと答えた。

クロノスは一度だけ笑った。覚えているとは言わなかった。それで十分だった。

ロイは入口から話を聞いていた。その話はダニエルとクロノスが一つの人生だとは証明しない。ただ、この部屋でかつて誰かが小さな自由を守ろうとしたこと、そしてその論争が今も大切であることを証明していた。

08 — 床下の記録

封印された複製を受け取った独立資料庫は、作業場の最も古い備品台帳にある重量計算が、培養器の下の床の重さと一致しないことに気づいた。タイルの下に機械式の隠し引き出しがあった。ヌルは遠隔操作ではなく工具を使って開けた。

中には、途切れた円の印を刻んだ小さな金属の円筒があった。巻き付けられた紙片には手書きの日付が記されていた。軍の部隊編成より前であり、リードの最初の手術よりもはるかに後の時期だ。

レイチェルはインクと紙を調べた。材質は確認できるが、そこに書かれた主張が真実かは分からない。

紙片にはこうある。

《五度目の帰還は、私たちが許可したものではない》

ロイはクロノスが隣に立つのを感じた。

「誰かが僕を戻したってこと？」と少年。

「誰かがそう書いたということだ」とロイは答えた。「誰が、なぜ書いたのかは、これから調べなければならない」

床をかすかな振動が伝わった。外では雨が閉ざされた昇降路を不規則なリズムで打っている。クロノスは円筒に手を伸ばさず、見つめていた。

「閉じたままにできる？」と聞いた。

「できる」

「なら、僕が決めるまで閉じておいて」

ロイは円筒を証拠容器に収め、レイチェルとヌルの前で封印を記録した。開封はしない。それによって一つの答えを、ひょっとすると重要な答えを失うことになる。それでも、この夜初めてロイには、その代償が調査の障害ではなく調査そのものの一部だと理解できた。

彼らは夜明けとともにエレベーターで地上へ戻った。都市の給水ポンプは暫定憲章の下で動いている。広場では作業員が古い身分認証機を取り外し、異議申立てを受け付けるサービス端末へ交換していた。この都市の外見からは、一人の子供の歴史が、その子に名を与えた組織よりも古いかもしれないことなど分からない。

クロノスは、セバスチャンの投函されなかった手紙をポケットに折りたたんでいた。彼は名前を選ばなかった。自分で開けられる扉を選んだのだ。